

遅読の讚 関口存男

辞典と首っ引きでポツポツ読む外国語には、その遅々たるところに、普通人の気のつかない値打ちがあります。それは、"考える" 暇が生ずるということです。否でも応でも吾人を、"考える" 人間にしてくれるという点です。

どんな良いことが書いてあっても、スラスラと読めたのでは、マア、大した効果はありません。どんなくだらないことが書いてあっても、その数行を繰り返しかえし繰り返しかえし読まなければならないとなると、それに関係したいろいろな事をついでに考えるから、上わすべりして読んでいる際には気のつかない色々な事に気がつきます。いわんや、多少くだる事が書いてある場合には、それを何度も何度も読みなおしたり、その数行を眺めたまま五分も十分も考えこんでしまったりするということは、単にそれを書いた人の真意に徹する機縁となるばかりではない、時とすると原著者の意図しなかったところへまでも考え及ぶという効果を伴います。

なさないことには、御同様、"人間" というやつは、とにかく、考えないように考えないように出来ている。上わすべりするように上わすべりするように出来ている。スラスラ読める母国語ばかり読んでいると、うっかりすると、上わすべりした、ツルツルした、平坦な人間になってしまうおそれが充分にあります。

この平坦なツルツルした意識にブレイキをかけて、否でも応でも一個処を凝と眺めて考えさせるという効果、-----外国語をやる主な目的は此処にあるのではないのでしょうか？

ほんとうは、翻訳をしてみると、なお徹底します。どんな文章でも、これを全然たちの違った日本語で云いなおすとすると、原文を正しく理解しただけではまだ駄目です。原著者と同じ気持ちにならなければダメです。否、時とすると原著者以上の所へまでも乗り込まないと、その同じことを責任をもって引き受けて本当に日本語で再現することはできません。そのためには、何度も何度も同じ個所を読みなおして、自分自身の考え方を叩きなおす必要が起ってくる。問題は此処です。

考える力というものは恐ろしいもので、どんなツルツルした平坦な馬鹿野郎でも、否でも応でも考えないわけに行かないように仕向けられるというと、長い年月の間には、相当いろいろな事を考えるようになります。いったん考える癖がつくと、時とすると、何かのはずみに、甚だ馬鹿野郎らしくもないことを考えて、自分でビックリすることすら起って来ます。そういう馬鹿野郎が、ひとつ間違うと、文豪になったり、詩人になったり、偉人になったりしてしまうのです。偉人とか何とかいうのは、どうせみな、間違っただけなんですからね。一つ間違っただけではないが、二つ三つ間違うと、偉人とか天才とか云った飛んでもないものになってしまうのです。間違いほどおそろしいものはない。

だから、そんな事になっては大変だと思ふ人は、あんまり一つことをシツコク考えてはいけません。スラスラと、人の書いた通りに読み、人の考えた通りに考えておくのが、いちばん安心です。語学のやり方にもそんなのがある。

けれども、なんなら天才になったって構わない、と考える人は、あらゆる機会を利用して、自己独得の考え方を育成しなければなりません。ただし、その自己独得の考え方というやつは、自分ひとりで眼をつぶって考えていたって出て来るものではありません。人生は、たとえ大根一つ植えるのだって、最初はみんな人真似なんですから、まず人真似をしなければならない。問題は、どういう風にその人真似をするかです。

他の方面のことは知らないが、思想、文学、その他いやしくも、"文" に関係のある方面のことは、すべて "遅読" が出立点ではあるまいか、とわたしは語学者らし

い妙なことを考える次第です。

これには、私自身の体験も多分に加味されています。語学者として世渡りするためには、実のところを言えば、べつにそう大した考えは要らなかった。常識の範囲に終始し、人の考えそうな事を考え、人の言いそうな事を言うのが、これがむしろ語学の本義ですからね。-----ところが、数行の文を、ほんとうに責任をもって人に理解させようとする、どうしても、それを一応すっかり自分の考えにするために、何度も何度も読む、或いは遅読する必要が生ずる。現に教室の語学はすべて遅読です。-----この遅読によって、わたしの頭の中には、別に語学とは当面何の関係もないような、いろいろな趣味と道楽が生じて来た。形容詞の語尾や動詞の変化とは直接大した関係はないのですが、語学を離れて、"そもそも人生というもの" が面白くなってきたのです！人は、語学の副産物というかも知れないが、副産物にしては、これはまたあまりにも本問題すぎる！ "人生が面白くなった"なんて副産物は、これはもはや副産物ではない。こうなると、もはや主副を逆にして考えた方が正しいでしょう。

語学には直接大した関係はない、と云ったが、"間接"には大関係があります。ここも問題が逆になって来るわけで、語学にとっては、直接に関係のあることよりは、むしろ間接に関係のある事の方がズッと直接に関係がある……ということが、あとになってわかって来た！

そして、それらすべてが、外国語が遅々としてしか読めなかったおかげなのです。
(1956年11月)

ひね水

"ことばをひねる"ということは、"考えをえぐる"ということに等しい。"考えをえぐる"ということは"人間をねる"ということです。言語と思想と人間！"ひねる"と"えぐる"と、"ねる"！

夫子みずからの人間をねることなしに、人を感服させるような思想をひねり出して、人の胸をえぐったり、人のドタマの中を搔き廻したりすることはできません。人様の胸をえぐったり人様のドタマの中へ手を突っこんで搔き廻したりするためには、まずそう遊ばず御方自身頭の中が搔き廻っていなければならぬ、胸がえぐらっていなければならぬ。また、それらを言葉で表現したり説明したりする際には、言葉の言い廻しはむしろ第二段の問題で、それより前に、まず自分の考えていることを一抉り、二抉り、三抉り、右から抉って届かなかった所は左から抉って掘り下げ、左から抉って抉り足りなかった所は右からメスを廻して底を衝くといったようなあんばいに、誰が考えてももはやこれより以上は考えられないというところまで考え到った上でなければ、ほんとうの表現ができるものではない。

"表現をひねる"とか"言葉をひねる"とか"言い廻す"とか云うことを言いますが、"考え廻す"ことなしに"言い廻す"なんてことはできません。言葉だけひねったって、ろくな言葉は出て来ない。考えをひねってはじめて適当な言葉が出て来る。

"言葉をひねるより考えを抉れ"？"考えを抉るより人間を練れ"？サア大変だ。まるで精神訓話みたい。してみると関口さんも、だいぶん焼きが廻ったかな？昔はこんなヤボな調子のことは言わなかったようだが……

"文部大臣！"だと？誰ですか、くだらない野次を飛ばすのは。

野次を飛ばすのはチョットしばらくお待ちください。話というものは、聞いているうちに段々アベコベになって来て、おしまいにはアレッ？と言って舌を捲くことも無きにしもあらず。

まず、事をハッキリ考えていただきたいが、考えをえぐることなしに、単に"人間"だけ練るなんてことができますか？"人間"から"考え"を取ってしまったら、後に残るのは"五尺の体躯"だけです。人間に麻酔をかけて、すっかり眠ってしまったのを、按摩さんにでも揉ませるなら、それはなるほど"考え"をこねることなしに"人間"をこねてる、ということになるでしょうが、まさかそんな事を言ってるのじゃないということは申しあげざるまでもありますまい。

次に、言葉をひねることなしに、考えだけひねるということは……たとえば芭蕉といえどもなし得なかったことだから、われわれ共のようなもの出来るわけがない。原稿一つ書くのでも、筆を取って机に向った瞬間にあらかじめ頭の中に持っていた(或いは大抵の場合単に持っていた "と" 思っているにすぎない) 考えなんてものは、たとえゲーテといえども、ろくな考えでは無かつたろうということは、私は断言するに憚りません。それは恐らく、逆に引っくらかえったり、訂正を余儀なくされたり、混乱に陥入ったり、あわてて引っこめたりするための、滑稽千万な、偶然な出立点にすぎません。蹴っ飛ばすための踏台です。-----そんな踏台を、そのまま人前に出していた日には、ゲーテはお笑い草、芭蕉は啖も引っかけてもらえなかつたでしょう。

では、何が踏台を蹴つとばかすか？ 言葉の苦心です。何がお笑い草をゲーテにしたか？ 言葉です。何がオッチョコチョイを芭蕉にしたか？ 言葉です。

理窟の上の順序と、"事実" の上の順序とは逆です。理窟の上では、人間あつての思想、思想あつての首葉ですが、事実の上では、言語あつての思想、思想あつての人間なのです。御存じの通り、理窟というやつは人間が考え出したもので、これは大抵の場合大したものじゃない。ところが事実というやつは、これは神さまがお作りになったもので、大したものです。前者はマア好い加減に聞いておいた方がよろしい。後者はほんとうによく噛みしめる値打ちがある。

ほんとうによく噛みしめると、こういう "事実" が発見される：人様の気持に喰い入ったり、人様のドタマの中へギャツと手を突っこんで脳味噌をえぐってやろうなどというイタズラをしていると、逆にこっちの脳味噌えぐれちまう。まことに皮肉な大自然のしっぺ返しで、好い気味です！ しょっちゅうそんな目にあつて、目を白黒するほど煮湯を吞まされると、おしまいには……うっかりすると大天才になったり大思想家になったりすることがある……

"言葉" をひねっていると "考え" がえぐれ、考えがえぐれて来ると "人間" がねれて来る……これが言語と思想と人間の三位一体の神秘です。

それと同時に、こういうことも言える：いかにも捏ねたような理窟、いかにもひねったような言葉は、それはまだ本当の理窟ではない、本当の首葉ではない。それはまだ捏ね方の足りない理窟です。それはまだひねり方の足りない理窟です。それはまだひねり方の足りない言葉です。

ひねった上に、更にもう一ひねりひねれ！ 指先だけでひねり足りなければ、全身でひねれ！ はらわたの体操になる。全身でひねってもまだひねり足りなければ、こんどはモウやむを得ない、いよいよ本腰を据えて "全人" でひねれ！ 一切智を成就して涅槃に入らん。喝。(1956年12月)

羽目に立て！

いやに気むずかなことを言うようだが、私が語学者として最も嫌いな術語に Kontext (文脈、文の脈絡、前後関係) というのがある。なぜ嫌いかというと、科学的だからです。いやに客観的な、冷静な顔をしているからです。語学というものは憚りながら科学よりは少し上級に位するもので、こんな科学的な術語を用いるとイヤに……科学的になるから、それで嫌いなんです。私は "局面"、"羽目" 或いは "行きがかり" という言葉を用いたい。

"前後関係" というのは、たとえば怪事件の真相を探ろうとする頭の好い刑事の眼に映じた "あとさきの事情" です。刑事なんて、どうせ大した頭でもないから、そんな頭で考えた前後関係なんか、高が知れてます。あんよはお上手、手の鳴る方へ、といって犯人がすぐうしろの所で手をたたいている。むつかしい個所に赤線を引っぱって、その個所よりもっとむつかしい顔をして原文の前後関係を勘考している語学者もだいたいそんなもんだ。

それよりも、どうしていっそ "行きがかり" に捲きこまれてみないか？ 犯人同様の "羽目" に飛びこんでみないか？ 犯人同様の "局面" に全人格を挙げてぶつかって見ないか？ 行きがかり、羽目、局面というやつは、もはや前後関係とか文脈とかいったようなのんきなものではありません。前後関係は、"ひとつごと" です。"羽目" はわがことです。"ひとつごと" となると、どんな偉い人でも頭が一人前に働かなくなる。"わがこと"

ともなればどんな馬鹿野郎でも相当頭が働く。人間というものは、はなはだ勝手にできているのです。横着なんです、つまり。

前後関係と言えは好いところを、わざわざ羽目とか行きがかりとかいう底意地のわるい文法用語を用いるのは、一つはお年のせいで、口こごとがうるさくなったせいもあるでしょうが、一つは以上のようなわけもあるのです。これで序論は終り。次が本論。

X X X X X

語学を教えてくれる最高の権威は、教壇に立った先生でもなければ、蜜柑箱みたいな大きな辞書でもない-----羽目です！どこにも書いてない、しかもどんな場合にあてはめても絶対に間違いのない、しかもドイツ語にも英語にも全部共通な、しかも馬鹿にも阿呆にも間抜けにもわかる文法は-----行きがかりです！不肖わたくし自身の事を申しあげるならば、人にむかっては"原書を引ながら辞書を読め"とまで辞書を讚美しておきながら、そう申す私自身、実のところ甚だ不勉強で、(私の書齋にロクな辞書がないことは私の所に入出入する人たちがよく知っていると思いますが)辞書というやつはあまり引かない。こんなことを言うと自慢みたいになるかな？……しかしです！しかし、たった一冊だけ、手垢で真黒になったボロボロの、所々血痕さえ見える小さな辞書がある。それは神様が御発行になった"局面"という辞書です。(定価5円、各書店に無し。)

辞書をあまり引かない、などという、いかにも天才風を吹かすようで、不愉快に思いになる人も多いということは重々存じていますが、自分で自分の特長と欠点とを何人よりも意識しているわたしとしては、自慢になるか懺悔になるかは第二の問題として、固有癖を本当に鋭く言い表わすためには、此の一面をとらえてぶちまけるのがもっとも話が早くわかると思うきりの話です。ただし、此の悪癖は、ほんとうに偉い語学者になろうとする人たちにはすすめられません。うっかり真似をすると、私のような、単に語学を路傍でたたき売りするのだけが上手な、品のわるい語学者になってしまうおそれがあるからです。

辞書をあまり引かないから、従って辞書についての知識が稀薄で、興味もほとんどない。この妙な個癖をよく知らない本屋さんが、辞書を出す相談を持ちこんで来ると、わたしは、言下に"興味がない"と断わるが、興味がないというよりはむしろ、自分の最も不得手な方面だから、頭っから反感を覚えるのです。

だから、わたしが辞書に関して吐く迷論は、賛否両論とも、まあ、大したものじゃないと思って頂いても結構です。その代り、辞書よりも一段上の権威である"局面" "羽目" "行きがかり"についてわたしが述べることは、これは、語学をやる上の絶対の真理だと思っていただきたい。

辞書を引くときには、相先にツバをつければよい。わけのないことです。局面にぶつかり、羽目に立ち、行きがかりに飛びこむには、眉にツバをつける必要があります。顔を洗う必要があります。時として冷水三斗をあびる必要があります。局面は人間のたたきなおしです。人生の出直しです、あなた自身の再検討です。時には魂の入れかえです。大抵の場合はドタマのすげかえだ。

辞書は微妙な、上品な、体裁の好い、利いた風なことを言う。そして、ときどき間違っている。-----局面は、親切だけれども少し言葉つきの乱暴な交通巡査みたいなのがあって、マゴマゴして変なところを歩こうとすると"コラッ!"と言って、一喝する。相手が立派な紳士だろうがお姫さんだろうがおかまいなく、人権もへったくれもあったものじゃない、なんなら飛んで行って突きとばしても人の命を救う……

もっとも、こんな巡査に呶鳴られてばかりいると、こっちまでそんな巡査みたいな口調になってしまう……わたしがその好い例です。イヤ、悪い例か。(1957年1月)

自己と対決せよ！

むかし、田舎に疎開していた頃、ある爺さんが私に"西洋人も糞をたれたときには自分でケツをふくのかね?"と云って真面目な顔をしてきくので、"そうだ、自分でふくのだ"と云って教えてやったことがあります。ふくところを見たことはないけれども。

この爺さんのはマアあんまり極端すぎるけれども、ほとんどこれに近いアイマイな考え方は、外国語を研究したり翻訳したりする人の意識の中に多少見受けられるように思

います。西洋人だって我々と全然同じ人間なのだから、糞をたれたときには自分で手に紙を持ってお尻をふくのと同じように、何か考えたり言ったりするときには、我々でもやはり考えそうなことを考え、我々でもやはり言いそうなことを言うにきまっています。それを、西洋人のことだから万事勝手がちがっているに相違ないという漠然たる前提の下に、では、糞をたれても、何か便利な施設があつて、あるいは、お尻のあたりが少しちがった具合に出来ていて、手で拭かなくてもいいようになっているかも知れない……爺さん、おそらく、こういうふう考えたものに相違ない。"では、どういう施設があると思うのか？お尻のあたりがどういう具合にちがっていると思うのか？" と言って反問したとすれば、爺さんは、おそらく、少しまごついて、"いや……其処まで考えてみたわけではないけれど……" と言ったにちがいません。"其処まで考えてみたら、人に訊かなくたってわかる話じゃないか!" ときめつけたら、"いや、ごもつとも!" と言って頭を搔いたことでしょ。

べつに、此の爺さんばかり貴めるわけではないが、此の爺さんは、つまり、自分が考えたことがらに関して、自分で責任を持ってみなかったのです。自分で本当に責任を持って考えてみれば、おのずと崩れてくる考え方というもの世間にはたくさんあつて、それらのうちの、爆笑価値 100 パーセントに近いものは採り上げられて笑話になったり落語の材料になったりするが、爆笑価値 90 パーセント以下のものになるといふと、笑おうと思つても笑えず、怒ろうと思つても怒れず、同情しようと思つても同情できないから、笑いと思つても怒りと同情とが脳の中途半端なところで内証[ないこう]をおこして、顔面筋肉が妙な具合によじれて、はなはだ気持ちがわるい。平気なのは、そういう事をいつたり書いたりする御本人だけです、

外国人が外国語で書いたものを翻訳したり解釈したりする人たちは、単に語学の知識をもって原文と対決すると思つたら大きな間違いで、実は、"自分自身の最後の良心" と対決するわけです。奇抜な言い方だが、原文なんか問題じゃない、語学の学力なんか問題じゃない。"おれは、おれ自身の腹の底から響いてくる幽かな声に対して何処まで忠実か" が問題なのです。

いわゆる誤訳、曲訳というやつの中には、当人が本当にそういうものと思ひこんでいる間違つた誤訳もないではありません。称して"勘ちがい" という。けれども、こんなのは百の一つ、千の一つです。100 のうち 99 までは、ただいまの田舎の爺さんの話じゃないが、"実は其処まで考えたわけではなかつた" 式の誤訳です。"実は其処まで考えたわけではなかつた" というのも実は少し嘘なので、少し詳しく本人の気持ちに立ち入つてみれば、精神異常者ででもない限り、ほんとうは、"多少其処まで考えたわけだつた" のですが、"其処" の一歩手前のところで邪魔くさくなくて引き返して来たのです。つまり、自分自身の考えに対して責任を持つだけの勇氣に於いて欠くところがあつたのです。つまり、誤訳というやつは 99 パーセントまでは、誤訳する瞬間に、誤訳だということが薄々わかっている誤訳なのです。ちょうど、デパートで万引する立派な奥さんが、万引する瞬間に、これは万引だということが薄々わかっているのと同程度にです！

此の"薄々" というやつ、こいつがまことに始末にわるい！ "ハッキリ" わかっているなら犯罪です。全然前後不覚なら精神病です。"薄々" は、つまり、犯罪と精神病との中間なのです。給綸：誤訳の 99 パーセントは犯罪と精神病との中間現象である……

X X X X X

ずいぶんひどい事を言つてしまつたが、これはべつに語学をやる人を世間の笑い物にしようなどというくだらない見地から言つたものではありません。語学の間教育的使命、人文語学の旗幟を高らかに掲げんがための序曲を奏したにすぎません。語学は何学よりもよく"吾人を吾人自身の最後の良心と対決せしめる" という、おそろしい事実を指摘したにすぎません、此のおそろしい事実の前にちぢみあがるだけの感受性を持った人たち……その人たちは、すでにそれだけの事実によって、此の地上の少数の選良に伍したことになるでしょう。此のおそろしい事実の前にビクともせず、だいいちそんな事実があることを知るでもなく知らぬでもなく、どっちかというマア知らないことにしておく方が都合がよい人たち……その人たちは、つまり犯罪者と精神病者との中間現象、換言すれば、"ぼんくら" です。"ぼんくら" というのは、悪人にもあらず狂者にもあらず、悪に徹するだけの勇氣なきが故に幸にして善、狂に走るだけの力なきが故に幸にして正常なる人間-----即ち、勇なく力なき人間のことで。 (1957年2月)

言葉は腹の虫に直結す

言葉は思想の拠点です。言葉は思想のスイッチです。哲学者だなんて威張っても、若干の自製の"用語"を頼りにして自分の思想をやっと覚えていられるのが実状です。哲学の先生などに至っては、誰は何という言葉を用いた、かれは何という言葉を用いた、と、言葉を二三十知っていれば一年間の講義ができる。どんな雄大な思想でも、それが二三の掴みでのある、ハンドルみたいな"標語"に結晶しなければ、他人にもわからず、また-----ここが面白いところですが-----本人自身にもわからなくなる。

言葉は思想の部屋を開く鍵です。言葉使いの下手な人がクダクダと三時間しゃべって思想の部屋は開くものじゃない。それはちょうど、合わない鍵をさしこんで三時間ガチャガチャやっただって扉が開かないのと同じことです。そんなのは、はやくあきらめて、しずかにして頂く方が、はたが助かります。此の部屋には此の鍵、此の思想には此の言葉-----ピタリとしたのを持って来れば思想の部屋はパッと開きます。また、思想というものは、それがたくましい思想であればあるほど、これを観る者の腹の虫が向くべき方へ向いていさえすれば、パッと一眼に見通せるはずのものなのです。ところが、腹の虫というやつは、畜生のあさましさと申しますか、どんな腹の虫でも、頭と腹とは元来無関係にできていると見えて、ずいぶんトンチンカンな方を向いていることが多い。こいつに、ヤッ!と気合を掛けて、向く方を向かせるのが"言葉"です。もっとも言葉の中には、頭にはピンと来るが、腹にはちっともこたえない言葉というやつもある。けれども、そんなのは二流、三流の言葉です。一流の言葉は、頭よりはまず腹にグッと来るはずで。そういう言葉は、頭で考えたってわからない。頭で考えるのがそもそも間違っている。

ついでにチョット毒舌を弄することを許していただくと、世の中に頭のいい人が多いにはおどろきます。しかし、それにもましておどろくのは、腹の虫がトンチンカンな方を向いている人が案外多いことです。"右向け-----右ッ!"と号令をかけると、左を向きやがる!手をつけられない!そこで、わたしは、右を向かせようと思うときには、"左向け-----左!"と言うことにした。称して逆脱という。だから、わたしが左向けと云ったら、左を向かないでください。みなさんの腹の虫におねがいしておきます。

腹の虫というやつは、とにかく"虫"なんだから、どうにも始末にいけない。虫というやつは、御存じの通り、動物の中でも最も下等なやつですからね。結論として、お互い人間というやつは、頭はどうあるにせよ、根性の奥底は(此处をハッキリと考えましょう!)下等動物だということになってくる。

言葉は、思想の拠点、思想のスイッチたるのみではない、直ちにもって腹の虫と直結しているという、実にきわどい、気味のわるい、物すごいものなのです。この点を深く考えるのでないと語学の使命は真に理解されたとは言えません。

たとえば、喧嘩というやつは大抵言葉の行きちがいから起る。事実の行きちがいは事実を是正すれば元通りになるが、言葉の行きちがいは事実を訂正しても元通りにならない。人間は事実よりも言葉の方を重要視する動物らしい。"口先でうまいことを言うより、金の一万円も持ってこい"と、口先では言うが、そういう人にかぎって、"サア一万円呉れてやろう!"と言って畳の上へほうり出されたら、"なにッ?人に物を呉れてやるのに、呉れてやるとは何事だッ!"と言って正面切るにきまっている。それから先はモウ、"呉れてやる"という動詞の人称変化や三要素形、分詞からまた分詞が派生して厄介千万なことになり、拙俗法から直接法に飛んで横っ面を張りとはばすぐらいが落ちです。-----

それとは逆に、道元禅師の言に"愛語よく廻天の力あり"というのがある。ほんとうに相手の腹の虫に触れるような"やさしいことば"は、宇宙を四十五度廻転させるだけの力を持っているというのです。たとえ心になくてもいい、たとえ嘘でもいい、見えすいたお世辞でもいい、人にむかって、ほんとうに腹の虫がのびのびするようなやさしいことばを掛けてごらん下さい(たとえばあなたの細君に)!あなたの細君は思わずホロリとするでしょう。あるいはワッと泣いてあなたにしがみついても知れない。すると、その次にヘンなことが起って来る。たとえどんな人間でも、人間にワッと泣いてしがみつかれたら、五秒後にはモウ人間ではなくなる。一足飛びに神になってしまうのです。(わ

かるかな??)

言葉は思想の拠点、思想のスイッチであるばかりではない、或る種のおそろしい電線によって一直線に、"腹の虫" に直結しているのです。スイッチのボタンを一つ押せば火薬が爆発するように、押すべき言葉を一つ押せば人間は一瞬にして野獣になる、押すべき言葉を一つ押せば人間は一瞬にして神になる！人間を野獣にするのも一語であり、人間を神にするのも一語です。しかもそれは何の不思議もないことで、つまり、言葉というものは、頭とは、わたしもこれで長年ずいぶん研究しているが、どういうふうに結びついているのか、いまだによく判明しない……ことほど左様に厄介に結びついている。ところが、腹の虫とは-----つに文法や言語哲学でゴタゴタ研究するまでもなく---- "直結" しているのです。これほど簡単な事実はない。わかりますか？

言語に関する一切の学脱は、此処から出立するのでないと、ろくな学説にはなりませんまい。(1957年3月)

達意眼目

およそ小説を読むにしても、新聞を読むにしても、論文を読むにしても、手紙を読むにしても-----およそ、どんなくだらぬ事が書いてあるのを判読するにしても、はたまた、どんな幽遠な、玄妙な哲理が述べてあるのを解読するにしても、-----火星人が書いた文章、或いは銀河系以外の何等かの未知の世界の未知の生物が書いた文章ならばいざ知らず、いやしくも地球上の人間がこの数千年以内に書いた文章である限りは、たとえそれが数千年以前のエジプト語であれ、ギリシャ語であれ、梵語であれ、たとえそれが現代のドイツ語、英語、フランス語、その他何語であれ、いやしくも精神に異状のない人間によって書かれた文章には、すべて "達意眼目" というものがあります。そして-----これが驚くべき事実なのですが-----達意眼目は、大抵の場合、人が普通思っているよりは、ずっとずっと簡単なものなのです。

語学で苦勞しはじめてから四十年、その間、ありとあらゆる種類の文献で頭を悩まし、また他の多くの人々が頭を悩ますのを見、教室では学生がヘンテコな訳をつけるのを聞かされ、書齋では靴の裏から足の裏を搔くようなホンヤク書を読まされて六十年の今日に達した私として、もし誰かが私にむかって、"語学者として後輩に何か言い遺す好いことばはないか" と言って問うとしたら、私は言下に答えるでしょう："達意眼目は簡単な筈だ！"

言語というものの "なま" のままの姿に対して不感症のような頭を持った人の中には "そんなことを言っただけで、複雑微妙なことを言っている場合が実際にありますぜ！" というかも知れません。私は、それに対しても、否、特にそれに対して斯く答えたいと思います："それはおそらく達意眼目があんまり簡単すぎるために、表現によるほどき方が複雑微妙になってしまった場合のことではありませんか？それに第一、何かハッキリした単純な達意眼目の存在を想定しなければ、複雑とか微妙とかいう感じは起らないはずですよ。あなたが複雑とか微妙とかいう言葉をお用いになるのは、それはつまり "頭っから" 私の主張を容れてしまったことになりはしませんか？"

事実、複雑微妙なことの言っている文章があったら、その複雑、その微妙を、最後の暗い隅へまで追いつめて、それを書いた当人自身が恐縮して顔まげするほど複雑且つ微妙に解釈してごらんください。そうしたらその複雑が如何に単純な複雑であり、その微妙が如何に簡単な微妙であるかが、大抵の場合まるで一口嚙のように暴霧するとしたものです。これを称して達意眼目、或いは "けっきよく言わんとするところ" という！複雑微妙は表規であって、達意眼目は一点に集中した簡単なものである筈です。それは何故か？理由は簡単です。すなわち "人間のことば" だからです。カンガルーのことばではないからです。

以下に、典型的な一例を挙げて見ましょう。多情多恨の女王が犯した罪のことが問題になっている所ですが、乳母が女王をさとし慰める言葉に：

**Ich wiederhol' es, es gibt böse Geister,
Die in des Menschen unverwahrter Brust
Sich augenblicklich ihren Wohnplatz nehmen,**

**Die schnell in uns das Schreckliche begehen
Und zu der Höll' entfliehend das Entsetzen
In dem befleckten Busen hinterlassen.**

Seit dieser Tat, die Euer Leben schwärzt,
Habt Ihr nichts Lasterhaftes mehr begangen.

(Schiller: Maria Stuart 1. 4.)

さきほども申した事ですが、世にはおそろしい悪霊がございまして、ふとした油断の隙に乗じて人の胸に忍び入り、ほんのしばらく腰をおろしたかと思うと、矢庭に、何か飛んでもない取り返しのつかない罪を犯させ、犯させると同時にサット元きた地獄へ引きあげてゆく、ギョッと気がついて己れを顧みた時には時すでにおそく、心は罪に汚れている、といったようなことがございます。あの御所業は、あれはたしかに陛下の御生涯の汚点ではございましたが、あれ以来は別に何一つ悪いことをあそばしたわけではございませぬ。

太文字で印刷した六行の達意眼目は、日本語で言えば要するに "魔がさした" の一語に尽きます。ドイツ語には残念ながらこの "魔がさす" という通念がないために、複雑微妙な、蜿々長蛇のごとき六行の詩文が展開されてしまったというわけです。

"けっきょく何のことを言おうとしているのか?" これが言語と思想との間のギリギリ一杯最後の関係です。"一つの箇所では二つのことを言おうとするわけではない" これが言語の最後の原理です。(言語学者にこれがわかるかな? ちょっと不安……)

このバカみみたいな原理がムショウにおもしろくなったとき、その時、紫雲たちまち左右に開け、バツと五光がさし、天樂りゆうろうと鳴りひびき、エンゼルたちのストリップダンスとともに、"人間学修了証書" がヒラヒラとあなたの足もとに舞い下るでしょう。おめでとう!

(言語と思想・終り 1957年4月)

諷刺詩

狼と犬 関口存男

食糧難におちいって 骨と皮とになりはてた
お化のやうな狼が、 眼ばかりギョロギョロさせながら
路を歩いてをりますと、向ふの方から、これはまた
でっぷり太った、たくましい 色つやの好い番犬が
のそのそやってみります。

これは御馳走かたじけない、 こいつをまるごと噛ったら
さぞうまからうと思ったが、 相手はなにしろブルドッグ
こっちは骨皮筋右衛門、 さうやすやすと当方の
おのぞみ通り御馳走に なってはくれまい、それどころか、
ひとつ間違やあべこべに こっちが相手にたべられる……
こりやあきらめた、と狼は 辞を低うして話しかけ
世間話を皮切りに、 いろんなことを言ったのち、
相手の様子をつくづく見て、 てかてか光った毛のつやを
うらやましげに褒めました。

するとブル氏の申すには、 ほめられるほど毛のつやが
好いかどうかは別として なにしろとにかく腹いっぱい
食はなきゃどうにもならないさ。かう申してはすまないが、
君はあんまり腹いっぱい 食ってるやうには見えないね。
そりゃまあ實際無理もない、山にあたんぢや何ひとつ
食へやうわけがないからね。 ときたまなにかうまさうな
獲物がみつかったとしても、 まさかお皿にのつかって、

ひとついかが、といふ風に 待ってるわけぢゃあないだらう？
その都度實力行使だらう？ ひとつ間違や、あべこべに
こっちがやられるわけだらう？ それぢゃあまったく頼りない、
だいいち當てになりゃしない。

食へない方が當然で、食へるとしたらそりゃなにか
まぐれあたりだ、間違ひだ。
らくに食はうと思ふなら、わしといっしょに里へ來な。
里にゃ物資がうんとある。あるところにはあるんだよ。

言はれて狼考へた。
『聞けばなるほどもっともな、ところで、ただぢゃあ食へまいが、
いったいなにをするんだね?』
『なァに、なにをするといふ ほどの仕事はなにもない。
門の近所ががんばって、乞食が來たら追っばらふ、
あやしい者が通ったら 大きな聲でほえたてる。
それに反して主人には よろしく御機嫌とり結び、
家の者には愛想よく 尻っぼの一つも振っておく、
要するにただそれだけだ。
さうしておけばその代り それだけのことはあるわけで、
三度の食事は言はずもがな、おやつ、お三時、小夜食と、
人間どもの食ふたびに そのおあまりがいただける。
にはとりの骨、はとの骨、骨はたいていおれたちが
いただくことになってゐる。
いったい人間てえやつは 利口なやうでまぬけだね。
自分は肉しか食はないで、いちばん食ひでのある骨を
みなおれたちにくれるんだ。』

骨と聞いては矢も楯も たまらなくなる狼君、
ありがた涙と鼻みづと よだれをゴツチャに啜りつつ、
この親切なワン公に 案内されていそいそと
人里さしていそぐうち、なにげなくフト前をゆく
犬のうなじを見てみると、毛がすりむけてゐますので、
どうかしたかと尋ねると、

『イヤ、こりや別に何でもない、首輪の跡だ』との返辞。
『首輪といふと?』 ----- 『頸の輪さ、頸のまわりにはめる輪さ。』
『そりゃわかったが然しまた いったいどうして頸に輪を
はめたりなんかするのかね?』
『輪でもはめなきや、頸をすぐ つながれたんぢゃあ堪るまい。』
『つなぐ? こいつは初耳だ。するとなにかい、輪をはめて
鎖かなにかでつなぐのかい?』
『うん、まあさういうわけなんだ。』

つなぐと聞いて、狼は ハッと思はず立ちどまり、
相手の顔をジッと見て、顔が長アくなりました。

『さあ、さうなるとコリヤちよっと 考へなくぢゃあなるまいな。
いくら食へても、さうなると、其処には何か割り切れない
或種の物がありさうだ。 人権蹂躪……ぢゃなかつた
謂はば狼権蹂躪だ。
男をつなぐといふことは、 女でいへば醜業だ。
するとなにかい、君たちは 御機嫌とりして、つながれて、

たらふく食って、おぢぎして、 さうして尻っぽを振るのかね？
さうか。おかげで目が覺めた！ 氣持がハッキリして來たよ。
せつかく此處まで來たけれど、 わたしは山へかへります！
山へかへって瘠せこけて、 目をぎよろつかせて、うろついて、
木の根をかぢり、露を吸ひ、 齒をくひしばって我慢する！
我慢するともその方が つながれて尾を振るよりは
どれだけましだかわからない。

さうしていよいよどうしても 食へなくなった暁には、
行きあたりばったり其の邊の 路ばたにでもくたばって
見事に腐ってみせるから、 「男」の死骸といふやつを
話のたねに見に來たまへ！ いろいろお世話になりました、
では御機嫌よう、ごめんなさい。』(終)